

る。というのも、データとして不十分なものや同じ人に何度もインタビューしたケースが含まれているためである。年齢別構成を見てみると、18歳以下が12人、19歳から24歳までが17人、25歳から30歳までが8人、31歳以上が2人となる。ただし、このデータ分類に用いた年齢というのは、インタビュー時における自己申告による年齢である。また、例えば年齢が22歳であっても、14歳から援助交際を始めていたり、あるいはもう今は援助交際をやっていないが一年前までは援助交際をしていたというケースも存在していることを断っておきたい。

なおここで使用するデータは、①援助交際をしたと自認し、さらに②インタビュー内容をテープに録音することを了承した女性であること、③その録音したテープの会話内容をすべてノートに記録したという、この三つの操作を満たしたものであることを明記しておきたい。また調査方法は、テレクラ・伝言ダイヤルといった電話風俗に調査者が参加し、そこで取材相手を捜すという方法を採った。そこでこちらの社会的身分や調査の意図を説明した上で、インタビューの許諾を得ている。基本的にインタビューは一対一で、一回につき一時間から二時間半の間で行われている¹⁾。なおインタビュー内の()は、筆者の補足である。

2. 類型論のねらい

社会学における類型論の伝統は、E・デュルケイムにまでさかのぼることができる。彼は類型論という方法について、次のように記述している。「この方法の目的は、なによりもまず、無限定な多数の個体がある限られた数の類型におきかえることによって、科学的作業をより簡略化することにあるはずである」[Durkheim 1895=1978 p. 172]。デュルケイムがこの記述で述べていることは以下のようなことである。ある社会や集団を観察・記述・理解する際にその中に包含される事象や個人に焦点を当てるならば、多くの労力を費やすことになってしまう。しかし、いくつかの限定

された数の類型を抽出し、その類型によってその社会あるいは集団を把握するならば、観察・記述・理解さらには分析・予測という作業は容易になる。そして、抽出した諸類型が抽出の対象となった特定の社会や集団以外の、他の社会や集団に適応可能であるならば、その類型の一般性は高いとすることができる。このことに関して、デュルケイムは、「分類が真に有用になるのは、分類が、その基礎となった諸属性以外の属性を分類することを可能ならしめるとき、いかにすればあなたに生じる諸事実にたいする枠組みを与えてくれる場合に限られよう」[Durkheim 1895=1978 p. 172] と述べている。本稿で議論されることになる諸類型は、デュルケイムの考え方に敷衍して呈示されている。

類型論を展開するにあたって、まず最初に断っておかねばならないことでありかつ重要なことは、ここで述べる類型論はあくまで類型であって、この類型論によってすべての援助交際女性が明瞭に類型化できるわけではないことである。たとえば取材に応じてくれた援助交際女性の中には一つの類型に当てはまるだけでなく、二つあるいは三つにも類別できる要素をもっているというケースが存在する。このようなケースにおいては、主要であると考えられた一つの類型に類別するという作業を行った。フィールドワークにおけるインタビュー調査ではこのようなケースがしばしば登場する。しかしながらこれとは逆に、ある類型について典型的といえるケースも存在する。つまり、抽出したある類型を記述・説明するには最適であるというケースである。従って、ここでは援助交際女性の類型論に関して、このケースはこの類型を説明するには最適であると、筆者が判断したケースについて詳細に検討したい。

3. 援助交際女性の類型論

本稿で呈示する類型とは次の三つである。順に列挙すると、内面希求型「欠落系」、欲望肯定型「快楽系」、効率追求型「バイト系」の三つである。

1) 調査方法と具体的な手続き、データそのものの特性については、圓田 [1998] を参照のこと。